

たてもの 巡り



県内有数の観光地、山下公園と横浜中華街にほど近い本町通り沿いを歩いていると、ギリシャ神殿のような柱が特徴的な白亜の建物が目に入る。関東大震災以前の横浜にあった外資系銀行建築では、唯一残る遺構として知られる横浜指定有形文化財「旧露亜銀行横浜支店」（横浜市中区）だ。

英国人建築家バーナード・M・ウォードによる塔屋付きの3階建て。完成した1921年当時としては珍しい鉄筋コンクリート造りだったお陰で、震災にも耐えた。横浜開港資料館（同区）には、周囲の建物が崩れた焦土にボツンと立つ姿を映した写真が残る。

資料館の青木祐介副館長に



関東大震災直後の旧露亜銀行横浜支店（横浜開港資料館所蔵）

歴史重ね 未来誓う式場

旧露亜銀行横浜支店（横浜市中区）

よると、横浜には古くから港があったことから、居留地に外資系銀行の支店が数多く存在していたという。実際、ウォードは横浜で他の外資系銀行の設計も複数手がけている。青木さんは、「外資系銀行の実物が継承されていることは、外国の商館があった当時の横浜の記憶も伝えてくれる」と評価する。

建物は震災からの復旧工事を終えた後、ドイツ領事館や法務省横浜入国管理事務所などとして使われた。現在は、結婚式場「ラ・バンク・ド・ロア」として利用されている。式場の井口誠彦副支配人（50）によると、県が2005年、この地域の活用計画を策定した際、「過去と現在を経て未来を誓う」という結婚式のストーリーが、歴史的な建物と非常にマッチする」と、運営会社が再開発事業に参加。11年に挙式や披露宴ができる施設として再出発した。

今年4月に式を挙げた都内の会社員桜井傑さん（30）は、「式を挙げるまで現実味がなかったけれど、建物の荘厳な感じが湧いた」と語り、妻の会社員弥生さん（31）も「静ひつな空間に背筋の伸びるような

感じがした」と振り返る。ともに横浜市出身で、地元への愛情も更に深まったという。施設は昨年、宴会利用の受け入れも始め、近隣の法人を中心に利用がある。この夏には1階のゲスト待合室を利用して期間限定でカフェを営業。主な客層には婚礼を控えたカップルを想定していたが、一般客も訪れるなど好評だったといい、来年頭からの通期営業も検討しているという。



【メモ】みなとみらい線日本大通り駅から徒歩約3分。建物内には利用客以外は立ち入れないが、外観は見学自由で、古典主義様式の特徴が観察できる。建物脇には関東大震災直後の焦土に立つ写真が入った銘板が設置されている。



結婚式場として使われている旧露亜銀行横浜支店（横浜市中区で）



バーンロードとして使われている大理石の階段。「皆さん一歩一歩思い出を踏みしめるように歩かれます」と井口さん



100年前の姿を残す貴賓室の丸柱



カフェとして使われた1階のゲスト待合室

（田川理恵）